

---

**M u v - L u v   A L T E R N A T I V E   異界からの訪来者**  
トレイン

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト  
<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

M u v - L u v    A L T E R N A T I V E    異界からの訪来者

### 【Nコード】

N 0 4 7 3 V

### 【作者名】

トレイン

### 【あらすじ】

この世界には無数の世界がある。  
これはその内の一つの世界の物語。  
因果の渦から零れた存在が仲間達と世界を救う「あいとゆうきのお  
とぎばなし」

前作ですが、構想に無理が生じてしまい書き直させていただきます。

前作の続きを待っていた方々にお詫び申し上げます。

## プロローグ

SIDE???

「ここは？」

視界が真っ暗だ。

足も地についていない。

水の中を漂っている感じが体に抵抗を感じない。

何でこんなところに？

昨日は大学から帰ってきて…あれ？その後、俺は何してた？

助けて…。

「誰だ！？」

どこかから声が聞こえた。

助けて…。

「何処にいる！？」

声は聞こえるがその方向が分からない。

彼らを、僕を助けて…。

「ッ！がああああ！」

突然、頭に激痛が走る。

「…BETA…第4計画…白銀武…00ユニット…横浜…」

俺の知らない情報がフラッシュバックのように頭の中に入ってくる。  
いや、俺はコレを知ってる。

「…マブラヴ、それもオルタネイティブの方が」

頭痛が治まり、思考がはつきりしてきた。

「俺にあの世界を助けるってか」

お礼はする。力も与える。お願い。

「…なんで俺なんだ？」

今は言えない。

「『今は』ってことは、いつかは教えてくれるんだな？」

約束する。

「しょうがねえ、分かったよ。どうせ、いやと言っても聞き入れてはくれないんだろ？」

ごめん。

「それで？どんな力をくれるんだ？半端な力じゃ、あの世界を救うなんて出来ねえぞ？」

そう。力を与えてくれると言ってもニュータイプや超電磁砲程度じゃBETAの物量には敵わない。

「ッ！？いだだだだっ！！」

また頭痛が襲う。

「おいおい、マジか？確かにコレなら何とかなるかもしれないが……  
こういう意味の力かよ。  
世界がひっくり返るぞ。

もう時間。

「やれやれ、それじゃあ死なないように頑張りますか。」

真っ暗だった視界の中心が白く光り始めた。

「そういえば自己紹介がまだだったな。俺は刹那。霧島刹那だ」

光がどんどん強くなる。

僕は。

声が聞こえた瞬間に俺は意識を手放した。

## プロローグ（後書き）

感想やアドバイス等、待ってます。

## 第1話 異世界（前書き）

ようやく1話目投稿です。



## 第1話 異世界

?年 ?月?日

日本帝国 横浜郊外

S I D E 刹那

目を覚ますとそこは瓦礫の山だった。

「夢じゃなかったみたいだな」

とりあえず、状況の確認だ。

服装は…国連軍のC型軍装。

階級章、認識章は…無し。

武器は…全部格納庫の中。

その他の装備は…ブレスレット型量子格納庫、転移用の携帯ゲート。

「それで、ここは？」

格納庫から腕時計型の携帯端末を取り出しGPSで場所を確認する。

「横浜か。基地は向こうだな。そういえば今はいつなんだ？」

端末で日付を確認すると

2000年4月22日

つまり、武が来るまであと1年半もあると言う事か。

1年半の間にどこまでやれるかだな。

00ユニット関係は武が来てからじゃないと進められないから今の俺に出来る事は各前線国家の軍事力の強化ぐらいしかないな。

第4計画でBETAに対する諜報が成功してもそれを生かす事が出来なきや意味が無い。そのために通常兵器、特にハイヴ攻略を考えたと戦術機関連の強化が必要になる。

となるとアラスカのプロミネンス計画への参加は必須だろう。

1番介入しやすいのはXFJ計画だけど、計画始動までは1年もある。横浜基地からの派遣としても不知火の改修には帝国からの許可が必要だし、他の機体も横浜からだと手を出し難い。

そもそも機体の大規模改修は開発元の許可が必要だし…。

XFJ計画が始動するまではどこかの前線で実績を残す方がいいな。この時期の極東地域の大きな動きはソビエト領内に2つのハイヴが新たに建設されること。さすがにソビエトは危険過ぎるか。

今すぐ行動するなら欧州方面かスエズ方面だな。

向こうで実績を残せばアラスカでも動き易くなるだろう。

「まあ、まずは香月博士と会わないとな」

何をするにしても第4計画という後ろ盾は必要だ。

横浜基地へ向けて瓦礫の町を歩き出す。

「それにしても酷いな」

歩けど歩けど周囲は瓦礫ばかり。

所々、戦術機の残骸が落ちているが瓦礫の9割は民家だ。

「お？あれは…」

枯れた桜並木の坂の上に巨大なパラボラアンテナが見える。  
うん、ダサイ。

アレを見て爆笑する武の気持ちが少し分かった気がする。  
坂を上ると基地の門とそこを守る衛兵が立っているのが見える。

「さて、まずはウォーミングアップだな」

2人の衛兵に近づく。

「機密任務より帰還した。香月副司令に取り次いでくれ。任務の内容上、認識証の類は持ち合わせていないが、この暗号を伝えてくれれば分かる筈だ。名前は霧島刹那。階級は少佐だ」

2人の前で敬礼をして疑う時間を与える前に捲くし立て、1枚の紙切れを渡す。

「りよ、了解しました」

「おい！」

黒人の衛兵が返事をするが、アジア人の衛兵は納得できていないように抗議の声を上げる。

「博士に関する事は全て報告するように言われてるはずだが？」

「…了解しました」

黒人の衛兵が詰め所に向かい、アジア人の衛兵が俺を見張る。

少佐と思い込んでいるせいか、どこことなく硬い雰囲気だ。

ちなみに勝手に階級を少佐にしているが、俺に与えられた事前情報によると香月博士の権限なら少佐程度の階級は用意できるらしい。  
黒人の衛兵が戻ってきた。

「迎えが来ますので少々お待ち下さい」

「分かった。迷惑をかけるな」

「いえ、仕事ですので」

まだ基地の雰囲気は緩んで無いようだな。

今の内から定期的に抜き打ちで訓練すれば緩むことも無いだろう。

「伍長、名前は？」

「自分はグエン・ヴァン・ナムであります」

「自分はジャカーリム・シュンガルであります」

アジアの方がグエン・ヴァン・ナム、ベトナム人か？

黒人の方がジャカーリム・シュンガル。

よし、覚えた。

「2人共、東南アジア出身か？」

「はい、自分はベトナムでジャカーリムはマレーシア出身です」

マレーシアってことはインド系か。

「横浜は寒くないか？」

BETAによってユーラシアの地形が変えられたため日本の気候も大きく変わり寒冷化が進んでいる。

「そうですね。着任当初は参りましたよ」

2人と適当な会話をしながらこの情報を聞き出していく。  
すると1人の女性が基地からやってきた。

「霧島少佐ですね？私は副司令の秘書をしているイリーナ・ピアテ  
イフ中尉です。副司令の下へ案内させていただきます」

「了解した。ナム伍長、ジャカーリム伍長、世話になった」

2人に礼を言ってピアテイフ中尉に続いて基地に入る。

…

…

…

基地に入ったあと長時間の身体検査を受けさせられた。

まあ、自分で言うのもなんだが、不審者を入れるんだから当たり前  
だろう。

「それで？あなたは何者？正直に答えないと…」

検査を終えて香月博士の執務室に到着すると護身用のハンドガン  
構えた香月博士が待っておられました。

とりあえず両手を上げて敵意が無い事を示した。

「自分は霧島刹那と言います。信じられないかもしれませんが、別

の世界からこの世界を救うためにやって来ました」

「笑えない冗談ね。精神科で診てもらったら？」

「先ほどの暗号をお聞きになったんでしたら、聡明な博士なら分かるはずですが？」

「…ッ！確か『量子を持った因果の果てより第5の神の門を閉じるための鍵となる、第4の機械の脳を動かす手伝いに来ました』だっけ？」

「はい。これが何を示すかお分かりでしょう？俺が嘘を吐いて無いか第3のウサギに聞いてみては？」

「……」

こちらから目を離さずデスクの通信機を操作する。  
心なし博士の視線が厳しくなったように見える。

「…いいわ、話を聞いてあげる」

ハンドガンを下ろし、デスクに腰を預けてくれた。

「それで？あなたの目的は？」

「博士の計画の支援ですね。主に兵器関連の開発や現行兵器の強化などです」

「？それがどう支援になるっての？」

「第4計画はBETAに対する諜報を行い、それで得た情報を基に有効な対BETA戦略を確立することですよね？」

「…大まかに言えばそうなるわね」

「現存の人類の戦力…いえ、2002年時点での戦力では第4計画が成功しても、その後各ハイヴの攻略にはかなりの時間が掛かるんです」

「…なるほど、つまり私が研究を進めてる間に人類の戦力を強化してハイヴ攻略をやりやすくするってことね」

「はい、そのための第1歩として、【XM3】の普及です」

「【XM3】？」

「戦術機のOSです。00ユニットの試作品の1つを利用して作られた物なんですが、これがあるか無いかで大きく変わります」

「OS変えただけで？信じられ無いわね。…試作品の1つを使うってことは、まさか私にそれを作れってこと？」

「いえ、既に設計図とプログラムは用意してあります。あとはこれを量産する許可を下されば問題ありません。因みにこれ自体も交渉材料になりますよ」

格納庫からディスクを取り出し博士に渡す。

「今のは？」

「別世界の物で【量子変換式格納庫】と呼ばれる物です。物質を量子化させて保存することが出来る格納庫で、このプレスレット1つに最大で月と同等の体積、質量を保存できます」

「…へえ、便利そうね」

「そのディスクの中に【X M 3】の詳細が入っています」

「ふーん…それで？他にもあるんでしょう？」

「ええ、次に戦術機の改良です。現行の機体では【X M 3】の機能を最大限に発揮することは出来ません。出来たとしても機体への負担が大きく、機体の寿命を縮めます」

【X M 3】（ソフト）を導入してもそれを扱う機体<sup>ハード</sup>が対応していなければ意味が無い。

【X M 3】によって得た反応性で機体に負荷が掛かり過ぎたため整備が必要になった。桜花作戦の時に不知火が使えなかった原因の1つがそれだった筈だ。

「そのため専門の試験部隊を設立したいと考えております。それで博士にはこれらを揃えていただきたい」

必要なものを書き出し博士に見せる。

「…各国の衛士と機体、それから整備士等の後方要員ね。こんなの揃えられると思ってるの？」

「第4計画の権限を使えば可能な筈です。【X M 3】の有用性を示せばもつとやりやすくなると思いますか？」



「…分かったわ。ただし、期待はしないで」

「了解です。各衛士の詳細です。興味深い情報も入ってますよ」

格納庫から別のディスクを取り出し博士に渡す。

因みにこれらの情報はさつき国連軍を始め、各国のデータベースにアクセスして手に入れたものだ。

「戦術機関連については今はこの辺で、次に00ユニットのことなんですが…」

「…なんでそこで切るのよ。さっさと言いなさい」

「…まず量子伝導脳の素材にG元素      グレイ・ナインの使用しないで下さい」

「ッ！…理由は？」

「量子伝導脳の冷却に使われるODLは劣化すると反応炉での洗浄が必要になりますよね？」

「そうよ。ODLはBETA由来の物質だから洗浄には反応炉が必要になるのよ」

「その洗浄の時にODLを通して00ユニットが保有している情報が反応炉に流出します。そして、反応炉が得た情報は甲1号の反応炉      オリジナルハイヴの反応炉を経由して

全てのハイヴへと伝えられます。そしてその情報からBETAは学習します」

「ッ！？そんなことが…」

「事実です。現に甲1号攻略作戦の際、軌道から投下したA1弾が光線級に迎撃されず重金属雲の形成が阻止されました」

「…でもグレイ・イレブン無しに量子伝導脳は作れない。人類の技術の中には常温で超伝導が可能な物質は無いんだから」

「この世界ではそうですね」

「この世界？まさか…！？」

「はい、別の世界には常温で熱伝導が可能な物質が発見されています。その名は『サクラダイト』と言い現物もここに」

格納庫から親指大のピンク色の鉱石を取り出し博士に差し出す。

「これを解析して使えるのであれば必要な分だけ提供します」

「使えることを願うわ。これを人工的に生成することは？」

「現段階では不可能です。その世界でも採掘以外の入手方はありませんでした」

「そう…まあ手に入らないよりはマシね。他にあるかしら？」

「あとは量子伝導脳の理論なんですが、完成したものは手元にあります」

「なっ！？すぐに寄こしなさい！！」

「落ち着いてください。理論を渡すのは『サクラダイト』が使えるかどうか分かってからでも遅くはありません。どの道、00ユニットが完成しても調律は出来ないんです」

そう、00ユニット　純夏の調律には武が必要だ。

「：今から一年半後、2001年10月22日に鍵となる男がやってきます。調律はその男が来るまで出来ません。いえ、正確にはその男だけが調律を完成させることが出来ます」

「：つまり、そいつが来るまで第4計画は進まないってわけね。はあ」

「そう落ち込むことは無いと思いますよ。最終的には計画は成功しますから」

「そうじゃないわよ。自分で最後まで仕上げられないのが悔しいのよ」

なるほど、そういうことか。  
まあ、分からなくも無いな。

## 第1話 異世界（後書き）

感想やアドバイス等、待ってます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0473v/>

---

M u v - L u v   A L T E R N A T I V E   異界からの訪来者

2011年9月7日01時36分発行